

(リメイク) 付与術師の  
V t u b e r 生活

夢現 明

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現代にダンジョンが現れて20年ほどの時が流れた。

未だに謎や新たな発見が有る中、人々の生活は落ち着きを取り戻し始めていた

そんな中ネット上で情報や癒しを与える存在としてVtuberの活動も続いている

そしてここに新たなVtuberが誕生する

その名も【天結らいじゆ】

初のダンジョン装備制作系Vtuberとして産声を上げた

その魂を演じる付与術師、終 飛鳥はとあるスキルを手に入れたことにより予定を繰

り上げて配信を開始した

※この小説はカクヨム小説家になろうにも掲載しています。

# 目次

## プロローグ

第1話	初めまして	1
第2話	通信越しに!?	13
第3話	初配信を終えて……	23
第4話	鬼の姫	32
特別閑話#1	世界観	42
第一章		
第1話	約束	51
第2話	ダンジョンに行こう	59
第3話	ゴーレム捕獲戦	67

## プロローグ

### 第一話 初めまして

『待機』

『初配信来たー』

『ダンジョン系と聞いて』

『初の装備系V t u b e rと聞いて』

『自己紹介動画見ました』

『ぼらりネキの紹介で』

『こちとらみことさんや!!』

『ん? ピヨッター始めたころから推しだが?』

『ヒエ!! 強豪がおる!!』

『サムネの後ろにいるこの金髪ツインテールのメイドさんだれ?』

『よく見たら青い球みたいなのも後ろで旗振って応援しているよ』

鬼姫 ぼらり onihime porari

『気楽にやれよ?』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『楽しみなさいね』

『二人ともおるやん』

三つ並んだモニターの右側の一つに次々と文字が流れている。これはリアルタイムで配信にいる人が打ち込んだものが流れている。

もう左側には蒼銀の髪を一つにまとめ肩に掛け、黄金の瞳を持ちその額には特徴的な一本角が生えている水色の半衿と二の腕部分に切れ込みが有り半衿と同じ色が除いている白衣《びやくえ》の法衣に身を包んだ少女が僕の動きに合わせて動いている者や他のアプリケーションが開かれている。

そして中央のモニターには「迷宮装備生産系」という文字と名前が可愛いフォントで書かれていて先ほどの少女が静止画で移っているサムネイルが映っている。

桜が咲き乱れるこの季節、僕はVtuberとしてデビューする。

「結構いるな。初配信はそこまで人は来ないって聞いてただけど……ん？ ハハツ！」

準備もできている。告知もしつかりやった。最後の動作確認もばっちりだ。

確認を終えた後どれくらいの人を確認しているかの確認をしたら、聞いていたのとは違う状況に驚いてしまった。そこで、見知った名前がコメント欄にあるのを見付けて自

然と笑みがこぼれた。

そろそろ予定していた時刻になる……

「よし！ 始めよう！！ ボクの配信を！！ ライブスタート！！」

僕は配信開始ボタンを押した。

サムネイルから画面が切り替わりオープニングのアニメーションが流れ始める。

水色のカーテンが閉じられているところから始まりそれが開くと青いつやのある存在が左から右へピョンピョン跳ねながら移動している暫くすると金髪ツインテールのメイドさんが立つておりそこにたどり着くと少し会話をするように動作を見せてから同じ方向に移動を始める。

そのまま進んでいると少女が机に向って何か作業している所にたどり着いた。

机の上にあるのは六芒星以外何も書いていない魔法陣だった。

青い球体とメイドが少女に呼びかけると、少女は二人の存在に気が付き作業を止めて顔を上げる。

少し会話する動作を見せると書きかけの魔法陣が光り出しそれに気付いた三人は慌てて止めようとするが間に合わず魔法陣が爆発してしまった。画面いっぱい爆発の煙が広がる。

「ケホケホ失敗した〜 書きかけの魔法陣の前で迂闊な発言しちゃった。無理に止めようとしたから爆発しちゃったよ〜」

爆発後の煙の中から声が聞こえるそれは中性的で男の子でも女の子でもどっちとでも取れる声だった。

「え？ 今の拍子で配信開始ボタンが押ささった？ いけない早くあいさつしないと!!」

とりあえず「ウエントウス」!

少女の呪文のような声が聞こえると画面上の煙が流れていく。

煙が晴れるとそこには水色を主に所々に存在を主張する青い球体がいる背景。

稲妻を連想される枠に囲まれたコメント欄。そして中央に主役である少女の姿があった。

「こんばんはー ダンジョン装備制作系個人V t u b e rの【天結あまむすび らいじゅ】これよ

り配信始めるよ〜」

『アニメーションのクオリティ高いな』

『かわいい』

『待ってた』

『こんばんはー』

『初配信おめでどう!!』



『うーん……いい声』

『え!? 女の子?』

僕の挨拶に様々な声が返ってくる。そのことに胸が高まりつつ僕は口を開く。

「今日は改めてボクの配信に来てくれてありがとう! 今日改めて僕の自己紹介。今後の配信内容の紹介。そしてましゅまろに送られてきたみんなの質問に答えていくよ。最後までよろしくね」

『ましゅまろ送ったよ〜』

『俺も送った』

『私も』

『返答が気になって夜しか寝れない』

「じゃあ自己紹介行くよ! 僕の名前は天結らいじゅ、今16歳で身長は143cm!

冒険者としてのジヨブは付与術師だよ」

『小さい可愛い』

『16歳って、マ?』

『どう見ても小学生』

『ダンジョン系の配信の場合ギルドの許可が必要なうえ名前以外カードに書いてある通りにプロフィールに書かないとギルドが配信停止命令を出されるから事実だろう』

『博識ニキたすかる』

「そうなんだよー ダンジョンで慣れない配信をして注意力散漫になってモンスターにやられたケースが多くてギルドの許可なしで配信できなくなっただよね。僕としてはもうちよつと身長を盛りたかったんだけど……一応チャンネルのリンクから許可証のページに跳べるから気になる人はチェックしてね？」

この許可証のページへのリンクが無い状態でダンジョン関係の動画を挙げた場合すぐにチャンネルが消されてしまう。

僕の場合は装備制作系なことと特別な理由ですぐに許可が下りたのだが。

『ほえー、知らなかった』

『あッ、ホントだ。跳べる』

『というか付与術師なんだ』

『レベル上げ大変だね』

『経験や能力から決められるとはいえ、ジョブが勝手に決められるのは如何にかならないものか』

「ホントだよねー ジョブは世界が勝手に決める癖にそのジョブに見合った行動がレベルを上がる条件なんて……つと、この話は別の配信でしょう。今日は祝うべくボクの初配信なんだから」

『そうだね、その方がいい』

『完全に同意だけど』

『初配信で黒化しかけるVtuber』

鬼姫 ぼらり onihime | porari

『苦労してるもんな……』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『そんなうちの子も可愛い』

「気を取り直して続き行こうか。僕の体を作ってくれたのがコメント欄にも来てくれて  
いる【産峰<sup>うぶみね</sup>みこと】さん。みんな大好き、みことママだよ。ボクも大好き♪」

鬼姫 ぼらり onihime | porari

『…』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『……ツハ!? ハア〜イ♡』

『大好きいただきました』

『一瞬、逝ってたね』

『ぼらリンも被弾してる』

『あの無邪気な笑顔の大好きだ。仕方ない』

「そして僕の体を動くようにしてくれたのは……僕の幼馴染でもある【鬼姫<sup>おにひめ</sup>ぼらり】ちゃん。幼馴染だからパパ呼びはしないからね♪ ぼらりん♪」

鬼姫 ぼらり onihime porari

『アツ……ハイ♡』

『あの俺っ娘姉さん系鬼娘のぼらりんが……』

『メス堕ちしてる……だと!』

『ぼらりんの話によく出る幼馴染はらいじゅちゃんだったか』

『ぼらりんの貴重なてえてえ来るか!』

「ふふ、ぼらりちゃんにV t u b e r になるように勧めたのはボクだからね……ボクもぼらりちゃんのデビュー当時から配信はやる予定だったんだ。ホントはもうちよつと技術を高めてからが良かったんだけど、ちよつと急に予定が早まっちゃって……みことママとはそのころからの付き合いだよ」

『なに!』

『まさかのここでぼらりちゃん誕生秘話が聞けるのか』

『ぼらりちゃんのデビューと言えば5年前か』

『製作期間も含めると当時小学生が依頼したって事?』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『そんなこともあったわねえ』

『今考えると小学生でVtuber始めるって言うのも結構異常だな』

『予定が早まったってどういうこと?』

「ぼらりちゃんのリスナーさんは知ってると思うけどぼらりちゃんに必要だったからね。まあ、この話はいずれぼらりちゃんと一緒にね? ……と言う訳で続けて、今後

やっていく配信に付いてなんだけどもまず一つ目はダンジョン装備の作成配信だよ。そのうち皆の意見を聞いた装備やアイテムも作ってみようかなとも思ってるよ皆もこんな装備が欲しいという意見よろしくね」

『早速コラボの予感 ワクワク』

『楽しみだぜ』

『迷宮装備作成系Vtuberだもんね』

『俺たちの意見も聞いてくれるのか!?!』

『それは助かるな!?!』

僕の発言におそらく冒険者のリスナーたちの歓喜のコメントが流れてきた。

やっぱりと言うか、ダンジョンの中で必要になるものが欲しいというのがボクも有るね。

そういう意見を集めるといいうのもこの配信の目的でも有る。

それが出来ればダンジョン探索での生存率も上がるからだ。

「次にダンジョン探索配信。これは必要な装備を作って、有る程度配信と探索に慣れてからね。じゃないと危ないから」

『そつかダンジョンに入れる年齢になってから間もないからな』

『安全第一だもんね』

『生産職を失うのは痛手だからね』

『そもそもV t u b e rでダンジョン探索って言うのは大丈夫なの？』

『実際に数人だけいる。それ用のアイテムを作ってる人かいるらしい』

『あく……確か顔ばれ防止の仮面に顔認識の術式が付与されて機械に発信する奴だよ。制作者はまだ情報出されてないけど……あれ？ 付与？』

『ま、まさか？』

『気になって確認したんだが、仮面を持っているV t u b e r全員がらいじゅちゃんをフォローしているな』

『確かぼらりんも持ってたよな？ つ……つまり？』

鬼姫 ぼらり onihime | porari

『そう言うことだな』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『そういうことよ』

「勘のいい皆は……大好きだよ♪ そうあの仮面を作ったのは僕なんだ。ちなみに言う  
とダンジョンにはいかないけどみことママにもプレゼントしているよ。みんないい直  
感しているよ。その勘は大事にね？ 今の時代は大事だよ。あつ、でも配信での注文は  
受け付けてないからそのところはよろしくね」

鬼姫 ぼらり onihime porari

『：』

産峰 みこと ubumine mikoto

『：』

『ぼらりんとみことママ』

『逝ったな』

『大好きいただきました』

『やっぱりか』

『みことママも持つてるのか』

『これは話題になるな』

『冒険者として勘は大事』

『ここでの注文はNG……了解』

「そして次が本命、まあこれができるようになったから予定が早まつただけだね。これに関しては説明するよりやって見た方が早いからやってみるよ？ 実際にやるの初めてだからドキドキする」

『本命？ 装備じゃないの？』

『予定が早まつた理由？』

『気になるね』

「うんうん。じゃあ行くよへ電子の海を介し我らを繋げよ」【コントラクトウス<sup>接統</sup>】からの  
 くへ星よ廻れく【ウイワートウス<sup>活性化</sup>】」



## 第2話 通信越しに!?

僕はV t u b e rとして活動開始予定が早まった理由を伝えるためにある魔法を行使した。

「へ電子の海を介し我らを繋げよ」  
「コントラクトウス」  
「活「性「化「接「統からのくへ星よ廻れ」

『え!?!』

『魔法の詠唱?』

『ん?なんか繋がった感じが?』

『体が軽くなった?』

『どういうこと!?!』

『え?なに?』

『なんかあったの?』

通信越しに魔法の効果が表れたようでコメントには困惑したよう文字が見られる。少々上手くいくか心配だったが問題なかったようである。

「今の魔法は魔力の循環を円滑にして魔力効率を上げる付与術だよ。今から明日の朝6

時くらいまで効果は続くように術式組んだから、その状態寝ると目が覚めた時にスッキリするんだ」

『これが付与術受けた時の感覚？』

『初めての感覚』

『ようは快眠付与？』

『どうか通信越しに魔法を行使だと!』

『え? どうやって?』

『ふつうは無理なんじゃ?』

鬼姫 ぼらり onihime porari

『これには俺も驚いた』

産峰 みこと ubumine mikoto

『これのおかげで修羅場を乗り切れたわ』

『効果も安心できそうだね』

「フフフ♪今はヒ・ミ・ツ♪その方が今後の楽しみになるでしょ? そしてもう一つ行くよ。へ縁ある者にわが庇護を」【マギ<sup>魔</sup>アフル<sup>力</sup>ーメン<sup>謀</sup>】

正直内容を喋ったとしても問題は無いのだが、今回は話さないように言いくるめられた。そうすることで視聴者の方で考察することが出来き、今後の配信でそのことを聴け

るかもしれない楽しみが増えてリピーターが増えるとの事だ。

『ふわ?!』

『ナニコレ? 暖かい……』

『これは……魔力か?』

『ちよつときついかも……』

『何も起きないんだが?』

『詠唱からするとさつききの付与が付いた人に効果が有るのかな?』

「正解♪そう言うことだよ。今何かしら変化があった人は明日の朝にステータスを開いてみるといい事が有るかもね。と言うことで質問コーナーに移ります。まずはましゅまろから」

『ステータス?』

『このちよつときつい感覚……まさか』

『そう言うこと?』

『どういう事だつてばよ?』

『こりや惜しいことをしたかもしれないわね』

『もうちよつと早く来れてれば……』

『ましゅまろきちゃ!』

中には何が起きるかも気付いた人がいるみたいだね。特に魔法を主体にしている人は狂喜乱舞するかもしれないなと思いつながら。僕は次の話題に移ることにした。

《初配信おめでとう》

《ハッピーバースデー》

…その他多数

「ぼくの誕生日を祝ってくれる言葉だね。ありがとう♪」

「改めておめでとう」

「いやーめでたい」

「俺たちは神話の始まりを見ているのかもしれない」

「ガチでそれな」

「ボクが神話？それならみんなもその神話の登場人物の一人になるね♪」

「その発想は無かった」

「俺たちも神話の一員」

「それは滾るな」

「でしょ？まだダンジョンに次いではほとんど分かってないことだからだね。誰にでもチャンスはあるよ！後は意気込みだけだよそれじゃ次行くよ」

流石にそんな簡単に神話の様な活躍なんてできないと思うけどまだダンジョンが出来始めともいえる時期なので誰でも伝説を残せる可能性は秘めている。

《どうしてVtuberなの?》

「ん〜……強いて言うなら拘りかな?」

『括り?』

『なんか思い入れでもあるのかな?』

『言いたくないなら良いんだよ』

鬼姫 ぼらり onihime | porari

『……』

産峰 みこと ubuminne | mikoto

『らいじゆ』

「ありがと……そのうち話すよ。次」

理由は有るんだけどそれを言ったら違う意味で注目を集めてしまうだろうからそれはボクが望むことじゃないからね。話すのはもう少し有名になってからになるだろうね。

《なんでアバター女の子?》

「ピヨッター古参の人からだね。犯人はみことママです。クリエイターとして最初から

全力でやられたら答えないわけにはいかないよ。それに、こんな可愛い立ち絵出さない訳にはいかないじゃないでしょ？可愛いは正義なんだよ!!……因みに声は地声だよ」

『え!?!男の子なの!!』

『この声で?』

『てつきり女の子かと思ってた』

『やはりか、みことママならやりかねん』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『男の子と分かってもこのかわいい声なら……ねえ?』

『分かる』

『つまり男の娘と言う訳ですね』

『みことママナイス』

『声変わり来たのってぐらいかわいい声だよね』

『身長に続いて声もなんて』

『成長期来たかってぐらいに不意義だね』

この質問が有ったから僕は最初に性別を言わないでいた。もうちよつとバツシグ的なものを受けるかなとは思っていたのだが、思ったより反感の声が少ないようで少し安心もした。でもやっぱり男っぽくないって言われるのはちよつとへこむ。

「……そうですね。どうせ僕は声変わりもこれ以上身長の成長も見込みのない子供体型ですよ〜」

『拗ねた』

『これは地雷かな?』

『拗ねた声も可愛い』

『ん?』

『……これから伸びるよきつと!!』

『牛乳のもう!!』

鬼姫 ぼらり onihime | porari

『よしよし。俺は分かってるからな』

『基本的ツンケンしているぼらりんが……』

『これはコラボに期待できるな』

慰めのコメントも来ているけど本当に見込みがないって分かっているんだよね。こればかりはどうしようもない事だから仕方ないんだけど。他のやつに付いてもそうだけど……

「まあ、体系が小さいってことは的になりずらいって言うメリットも有るから付与術師としては良いんだけどね。バフで強化すればスピードで翻弄もできるし」

『確かにそれはそう』

『バッファアークがやられないのは良き』

『小さいことにもメリットはあるのね』

『的が小さくて、すばしっこいのは本当に厄介だね』

『敵には回したくない』

『出来るってことは実戦でも使える技量は有るってことか。今でそれが出来るってことは将来有毛だね。』

『確か付与術師のデフォで覚えられる速さの上がるバフで魔物を翻弄するのは難しいから……重ね掛けも出来るのかな？この人数にバフを掛けれることも考えれば普通に行けるか』

『有識ニキ助かる』

「でしょ!?小さいことは悪いことといいきれないよね?……ん?デフォルトの重ね掛け?僕はそれでも行けるからいいけど……みんなはそれじゃあ辛いよね?それに、パッシブ効果の乗った装備を着用するときはその人の魔力を常時使用し続けることになるでしょ?それも考えて装備制作もしなきゃないから術式の研究には余念は無いのです。その術式に關しても需要が有りそうなら今後の配信で教えていければなって思ってるよ。一緒に試行錯誤するのも楽しそうだよね」



『そうか装備作成系だもんな』

『そこまで考えて作ってくれるのはホント助かる』

『術式の教授の需要はここにあります』

『一緒に試行錯誤するのは面白そう』

『思いついても適正で使えないようなのも有るからこういうところで意見を出せるようになるのはいいいね』

「うんうん。確かにそうだよねいい物を思い付いても能力上無理なことが有るともどかしいよね。なら任せて！付与術師って言うのは強化系はもちろん攻撃・防御・回復の魔法もできること前提の職業みたいだから意見から魔法を開発までやってみせるよ。その魔法を装備やアイテムとして付与して出せば皆も使える僕はいろんな装備を作るこ  
とが出来る……Win-Winだね」

『なんか心なしか目が輝いているように見える』

『生き生きしてるね』

『自分の考えた魔法を自分で使えるようになる!?!』

『夢が広がるな』

鬼姫 ぼらり onihime porari

『らいじゅは開発マニア（魔法も含む）だからな。』

産峰 みこと ubuminne | mikoto

『分野が違うから他の意見を取り入れるのは厳しいけど』

『話が合いそう』

『語り合いたいですね』

ボクの言葉にコメント欄が意気揚々し始めるやっぱりやりたくてもも出来ないものが有るというのはみんな同じみたいだね。僕も身長

関係でそういうことが有るからね。

そんなこんなで僕はましゆまろにこたえていくのであった。

## 第3話 初配信を終えて……

「……………では、そろそろ配信を終わります。次回は皆と一緒に配信タグ等や挨拶を決めていくからを忘れずに来てね？ 候補や装備の案はボク公式の掲示板を建ててあるのでそこで意見を出し合ってね♪ それじゃあお疲れさま〜」

天結らいじゆとして配信を行っていた少年は配信を締めくくり配信終了ボタンを押すやいなや表情を崩しせき込み始めた。

「ゴホゴホッ！ カフツ!!」

せきと同時に赤い液体が少年の口から零れ落ちる。……………少年は吐血していた。

「ピヨーン、ピチャ。ピヨーン、ピチャ。……………ピカー」

そこに窓際にいた青いジェル状の生き物(?)が少年に近寄り体を光らせるとそれに続いて少年も光り出す。しばらくそうしていると少年のせきが落ち着き始めた。

「ハアハア……………ング……………回復ありがとうアミー。おかげで落ち着いたよ」

「グツ」

少年の言葉にアミーと呼ばれた青いジェル状の生物は球状から触手の様な物を出し親指を立てるような形に変形させて返事をする。この生物は少年の最初の従魔である

ジュエルスライムのアニメリウス。少年が今この様にV t u b e rとしてデビューしてきたのも彼のおかげと言っても過言ではないほどの存在で、愛称はアミーと言う。アミーは回復を終えると特等席といわんばかりに少年の膝の上を陣取り、少年もそれが当然の如く受け入れる。そこに金髪ツインテールにメイド服を着た少女がお盆の上に茶器を乗せて近づいてきた。

「マスター。ローズヒッププティーです」

「コルティもありがとう」

何処か機械的な声とともに差し出されたのは貧血防止の期待も出来るローズマリーを使ったハーブティー。彼女も少年の従魔で名をコルティといい。装備作成時に疎かになりがちなの彼の身のお世話兼監視係として少年に送られた魔導人形である。

「鼻血も出てますね。少々失礼します。これで良し……まったく、だから忠告いたしましたでしょう？ 今のマスターでは負荷が掛かりすぎると」

「ハハッ、返す言葉もないなあ。でも最初から頼るのもどうかと思つたしどんな感じかも知っておきたかったからね。次やるるときからは二人とも補助お願いね？」

「グッ！」

「もちろんです」

そう笑つて帰す少年の名前は柊飛鳥<sup>ひいらぎあすか</sup>。今日初配信をした天結らいじゅを演じるしが

ない冒険者高校の一人。身長は配信で言った通り143cm。体重は41kg。冒険者としての職業は付与術師。基本的には付与術を使って装備やアイテムに魔法効果を付与する【付与職人「アムレート」】を生業としている。

彼が吐血したのはダンジョンの発生の後に人々が得た力である魔力のせいである。元来人は魔力を扱う器官は持つておらず（あつたかもしれないが当の昔に廃れてなくなつてしまった）後付けされたものだ。元来保持していなかった魔力器官は体が拒絶反応を起こし蝕む。飛鳥自体はダンジョンが発生してから生まれた世代ではあるがまだ完璧に馴染んだとはいえない。有る程度の量なら大丈夫だが、彼がある時手に入れてしまった「特殊スキル」により大量の魔力を生成するようになってしまった。先ほど慣らす一環とはいえ大量の魔力を使ったことにより体が拒絶反応を起こし吐血してしまつたということだ。普段は大量の魔力を使う時はアミーが魔力調節の補助に入る形になる。

それなら他人に魔力を流すのは如何なのかと言うと、これも一緒である。コメントの中にもいたであろう？本来ならば魔力酔いと言う現象を起こすのだ。だがこの少年、電気機器を基につながつた魔力の繋がりを使い一人一人の限界値と消費量を図り、各個人に限界値より少し多い気分が悪くなるかならないかのギリギリの魔力を配信で流したのである。それを行うことによつて多少の負荷が掛かり扱える魔力量が増えるのだが、

それを行うには膨大な処理が必要となり脳に負担がかかる。「成長スキル」によって多少は軽減することは出来るが数が数である為、脳に負荷が掛かりそれ故に鼻血が出るという形で現れたのだ。本来なら機械系の従魔であるコルティと思考をリンクして行うべきことだ。

「でもこれで僕のレベルも上がれば負担も減るようになる。あと、視聴者さんに限るけれど前回までみたいには付与術を受ける感覚に慣れてなくて混乱することも防げるからやめるわけにはいかないよ。出来れば状態異常にも慣れて冷静に対処できるようになってほしいところだけだね」

「周りの方々を思う気持ちは大変良きものだと思われませんが、どうかご自愛も忘れぬようお願いします。今回は目的を聞いていましたので寛容いたしました。次は有りませんからね？」

コルティの言葉にアミーも己の体を縦に揺らして賛同している。飛鳥はそういう二人に「分かっているよ」と返しローズヒップティーを口の中を含みながらアミーをついたりコルティを労ったりしながらのんびりし始めた。すると誰か彼の部屋に走って来る足音が聞こえた。

タツタツタツタツ。バタン！

「あれ？ 配信するんじゃないか？ たっつけ？ どうしたのち「らいじゅ！ 速く配信切つ

て!!」……………え?」

息を切らしながら現れたのは僕の幼馴染の栗原千尋<sup>くりはらちひろ</sup>。彼はコメント欄にも訪れていた鬼姫ぼらりを演じている。彼の言葉に思考が真っ白になる。少し間が空いて言葉の意味を理解してパソコンの方に顔を向けるとライブ配信を終えるかの確認の場面のままになっており配信は続いていた。

「……………あ」

『大丈夫!』

『何が起きたの!』

『あー……………やっぱりやせ我慢してたのか』

鬼姫 ぼらり onihime | porari

『補佐付けてなかったの!』

『この人数に!』

『感覚を知りたいって言うのは同意できるが……………』

『良かったちゃんと補佐役なる子いるじゃん』

産峰 みこと ubumine | mikoto

『寧ろいなかったら報告して止めさせるわよ』

『確かにレベル上がれば負担は減るが……………』

『俺たちは経験値でもあった？』

『確かにあの時はつらかったな』

『リスナー名は経験値に決定だな!!』

『なんかほのぼのし始めた』

鬼姫 ぼらり onihime porari

『そろそろ止めに行く』

『いてらー』

『って、行く?』

『うりうりーって。キャワワ』

『アミーそこ変わって!!』

『コレティのお頭撫でられた時の声もキャワ』

『アミーとコレティって誰よ?』

産峰 みこと ubumine mikoto

『確かあの子の従魔の名前ね。ほらオーブニングにも出てたでしょう?』

『あのスライムとメイドちゃん?』

『ヤッホー』

『やっと気づいた』



『ぼらりちゃん見参!?!』

『まあ幼なじみだし?』

コメントを確認してみるとどうやら本当に切れていなかったらしい。念のため視聴者さんに確認をとることにした。

「えーつと……今の話聞こえてた?」

『ぼつちり』

『うむ』

『従魔に愛情注いでいてめっちゃいいね』

『従魔の紹介求む』

『私もらいじゅちゃんの従魔になりたい』

『リスナー名は経験値に決定された』

『実名でなかったのが奇跡だね』

「う、うあああ! 絶対変な声出てるよ……実名出てない? 良かったああ」

『ハイ可愛い』

『大丈夫俺も従魔をかわいがる時はそんな感じだから』

『寧ろ癒された』

『従魔と戯れるだけの回も求む』

「ううう……この子供たちの紹介はタグ決め終わったからやる予定だったからその時にするね？ 次回からはコルティにも確認させよう」

「すみませんマスター。気付いてはいたのですがマスターの方を優先させていただきましました」

「コルティその後言わなかったのは」

「はい、ぼらり様。アミーの時はメンタルケアも含めてです、わたくしの時は……その／＼」

「その？」

「マスターのテクニクに抗えず……／＼」

「可愛いか！」

「それでいいよ？」

「ゆつくり休んで」

「ぼらりんそう言えばいたな」

「配信より主人……いい従魔だ」

「可愛いか！」

「可愛いメイド」

「立ち絵が無いのが悔やまれる」

『ないすシンクロ』

コルティの言葉に視聴者と飛鳥の気持ちが一つになった。普段の業務使用の彼女も凜とたたずんでいいがこの甘えている彼女もまた可愛いと飛鳥は思っている。まあどちらの彼女も彼一心なので尚更である。そんな彼女の可愛さを提供したところで飛鳥は締めを行うことにした。

「コルティのかわいさを共有出来たところで、今度こそお疲れ様でした」  
そう言つて飛鳥は今度こそ確実に配信を終了するのだった。

## 第4話 鬼の姫

「うん。今度はちゃんと配信切れてるよ」

「本当に大丈夫だよね？」

「大丈夫ですよマスター」

「グツ」

千尋の言葉に、飛鳥は配信を再度配信を切り忘れていないかを確認している。それはそうだろう先ほど盛大にやらかしたばかりなのだから。そこに千尋はスマートフォンを出して配信が本当に終わっていることを確認させた。コルティのとアミーもそれを見て大丈夫と反応し飛鳥は一安心し息を付く。

「最初からやらかしちゃったな……注意されてたのに」

「やっちゃったのは仕方ないよ。今回の切り忘れて出た情報が身元の分かる物じゃなかったのが救いだよ」

「うん。ありがとう千尋ちゃん」

千尋の言っている通り今回の切り忘れて出た情報は従魔の名前と飛鳥の魔力に対してのスペックの高さだ。ギルドには従魔の登録はアミーならスライム族、コルティなら

機械族という大まかな種族でしか登録されていない。

スライム族は冒険者のパーティーなら一人は確実に登録しているぐらいにはいるし、機械族も武器や防具を作っている人なら身の回りの世話をしてもらうために従魔としていてる人はそこそこいる。

なので、その程度の情報では身元がばれる可能性は低い。

「飛鳥君。今日はもう休んで？ アミーの処置は完璧だけど……結構ギリギリだったみたいだから」

「千尋ちゃんにそう視えたならそうなんだろうね。うんわかった。じゃあこの後の千尋ちゃんの配信にはいけないか」

飛鳥はこういう時に千尋の言うことには素直に従うことにしている。以前彼の言うことに従わずに作業した時はひどい目に合った経験があったのだ。

この後行われるであろう彼の配信を観に行けないことに非常に残念そうにしている。それを聞いた千尋は内心嬉しがつているのか少し口がニヤついている。

「じゃあアーカイブで見てね？ 私の古参のらいじゅさん？」

「絶対見るよ。ぼらりちゃん」

時は少し過ぎ千尋はパソコンに向かい自分の配信を開始していた。

配信画面に映るのは、カージナルレッドの前下がリショートボブの髪に二本の角が生え所々露出のある甲冑の様な和装を着ていて包帯で左目を隠してる女の子。

隠している包帯は緩んでいて少し動く。右の紅とは違う黄金の瞳がちらりと見える。

これが5年前からV t u b e rとして活動している登録者数500万人を超える大御所個人V t u b e r、鬼姫ぼらりの衣装である。

【宣伝】 幼馴染がV t u b e rになったぞ!! 【小鬼たちも推せ】

250, 811人が視聴中

「今から2時間ほど前に俺の幼馴染が天結らいじゆとしてV t u b e rデビューしたからお前らも推せ。まったく、今日まで我慢するの大変だった」

『いきなり命令で草』

【?50, 000

祝い金 おめでどう!!】

『だろうね』

『分かる』

『よく黙って入れたな』

『最近嬉しそうなのはそのせいだったのか』

【?500

今日はデビュー時の衣装だー』

『最近は何面付きが多かったからな』

『あれタイトル変わってる』

『雑談じゃなかった……ってマッ?』

『幼馴染の子が!』

【?10,000

ふえーん。視に行けなかった。開始10分前とか告知急すぎるよ〜

『仲間がいる』

【?30000

やっとかずいぶん待たされたな』

『でも前言っていた時期より早いね』

『たまたま休みでよかった』

『たまたま浅い層にいたから良かった』

『他のダンジョン系の見てたけどその人も急なデビュー配信に戸惑ってた』

『私の方は急遽予定変更で同時視聴に切り替えてた』

彼女のゲームやダンジョンも含め様々な内容の配信をしているが、中でも一番再生数が伸びている動画は、魔物のアイテムのドロップ率とドロップの傾向をまとめている動画だ。

当時年齢的にダンジョンに入れない彼女がどうやってドロップ率をまとめていたかと言うと、他のダンジョンに言っている人の動画を見る。それだと普通と言う人もいるだろうが彼女の場合、最低でも20以上の動画を流しそのうえコメントにもある程度反応しながらまとめているという特殊性がある。

そしてドロップの傾向を見つけたのは彼女が初でそれが彼女の名前を広げるきっかけとなり、V t u b e rファンだけでなく冒険者や魔物研究科を呼び込みここまでの登録者数となっている。

今までは視聴者も行っていたが、ダンジョンに入れるようになってからは自分で検証動画の確認作業を行っており最近では魔物討伐の教科書動画といわれているほどの者になっておりこのままいけば登録者数1000万越えも確実だろう。

そんな彼女の幼馴染と言うことで当然らしいじゆにも注目の目は向けられていた。だが、らしいじゆ、ぼらり、そして二人のママであるみこともらしいじゆがV t u b e rとしてデビューすることは発表していてもいつが初配信は言っていなかったのだ。



所謂ゲリラデビューと言うものであろう。

「ごめんな。10分前にいきなり言ったのは配信見てたやつならわかるだろうけどあまり多すぎるとどうなるか分からなかったからな。しかも今回は補助付けなかったからみたいだし……まったくもう。だから有無を言わせず布団に突っ込んできた。気になるやつはリンク張ってるからアーカイブを見な。」

あと、今日この衣装なのは前に行ったかもしれないがこのラフを書いたのはらいじゆだったんだよ。それでみことさんが完成させたって感じ。だから、らいじゆがデビューしたら絶対これって決めてたんだよ」

『あく確かに』

『それなら仕方ない』

『やっぱり無理してたんだ』

【?50,000

治療費】

『常連なのに今日いなかったのは理由があったのか』

『このあふれ出る面倒見の良さよ』

『らいじゆの話をすると途端に出る素のぼらりん』

『まったく、もう』 いただきました』

『鬼のぼらりんもいいけどたまに出る素のギャップもよき』

【?3, 000】

ぼらりんの素が出るほど心配させるなんて罪な子よね】

【?500】

足しにして?】

『何が有ったんだ?』

『アーカイブ見よ』

『今言うのも気が引けるけど、これからは二人が絡んで素が増えると思うと楽しみ』

『幸せそうなぼらりちゃんが見れると思うとね』

『ラフ書いたの彼なの!』

『言ってたっけ?』

『記憶にない』

【?1, 084】

そうか結構初期の時だから知らない人の方が多いのか】

【?884】

あの頃は結構ギリギリの発言も多かったわね】

【?884】

あの時ぼらりが代理出産なのは驚きとともに納得したね】

【?1, 084

みことさんにもトゲトゲしてたからな】

【?1, 084

そのたびにらいじゅちゃんが赤スパで殴って叱ってたのはいい思い出】

【?884

今でも彼の赤スパには怯えるものね】

【?1084

そう考えたら随分落ち着いたよな】

【?884

らいじゅちゃんと私たちの教育のたわものね】

産峰 みこと ubumine | mikoto

【?8, 840

あの当時は本当にいろいろあったのよね……

それだけあの子が貴女のこと考えて行動した証拠ね】

配信を観ていた人からはらいじゅを心配する声上がり、観ていない人からは困惑の  
声上がる。

そこで出てくる素のぼらりにコメントしている人々は本気で心配していることを感じ取り心配する人。

それでもらいじゆがデビューしたことに感謝するコメントにあふれた。

そしてぼらりのちよつとした誕生秘話におどろくが出てその当時を懐かしむコメントも現れる。

初配信は中学1年の時で当時はちよつとした人間不信を患っており常識に疎かった部分のあつたので危ない発言も当時していた。

そのたびに論していた古参の視聴者には所謂父親・母親面をするものもいる。

「次回からはしつかり補助付けて貰うから問題ないけどな……その節はお世話になりました。だからあんまり話題に出さないで? (……ホントあの当時はみんなにほんと迷惑をかけたな……)」

『それなら安心』

『ホントいきなりせき込んだから心臓に悪かった』

『ええんやで』

『……ぼらりん』

【?884

あの当 때가有ったからいまがあるんだからね】

『悔い改めれる事は良い事ね』

ぼらり自身もその当時の出来事は黒歴史と思っっているのか苦虫を噛み潰したような顔をしてその話題を避けようとする。

その後思ったことが口から洩れてしまったようで慰めのコメントが流れる。

「従魔の子たちがいるから大丈夫とは思っていたけど気が気じゃなかったな……って、俺のことはいいんだよ今はらいじゆのデビュー記念だからな」

『うん』

『そうだね』

『と言つてもなあ』

『ここのリスナーは殆ど知ってるならなー』

『たびたびぼらりちゃん語ってるし』

『何なら声だけならここで出演していたからね』

『公式ウエキも出来てるし』

『いいから！ らいじゆについて語っていくからな覚悟しろよ？』

この後時間いっぱいらいじゆの魅力を語って小鬼たちをほっこりさせたのは話すまでない事であろう。

## 特別閑話#1 世界観

天結らいじゆが配信を始めて数日たったころ。とある配信が行われた。

【ギルド企画】ダンジョンのある世界【新情報あるかも?】

8, 452人が視聴中

「皆さんこんらい〜」

今回はギルドからの依頼で世界状況の説明をしていきたいと思えます」

『きちや』

『ダンジョン系配信者の宿命会』

『こんらい〜』

『状況は逐一更新されているけど文章で追うのはきつい。こういう配信は助かる』

『ギルドもいい計らいをする』

今日の配信はリスナーの言っている通りダンジョン配信者の宿命会といわれている今の世の中の説明会だ。

基本的には学校の授業でも習うことではあるがまだダンジョンが出現してからの歴史は浅いので新しい情報が次々現れる。ギルドからも情報は出しているが隅々までは

いきわたらない。

発信源はいくらあってもいいということで、ダンジョン系配信者は配信開始月に現状の世界状況を配信することがギルドから定められているんだ。

「はい。と言う訳でギルドからの依頼で今の世界状況の説明会をやつてぐよ？ みんな着いて来れる？」

『もちろん』

『あつたぼうよ』

『寧ろらいじゅちゃんがついて来いってんだよ』

『今日は俺たちが経験値になるんじやなくらいじゅちゃんから経験値を貰う会だったか』

「じゃあ今回もこの二人と一緒に説明をしていくからよろしくね？」

「はい。マスター」

《グッ!!》

『コレティーちゃん来ちゃ』

『アニメリウス見参』

『グッ!!』

『やっぱりこの組み合わせよな』

そうして僕はコルティとアミーの立ち絵を立ち上げる。

2回目以降の配信から作業配信以外ではもうお馴染みになっている光景ではあるがリスナーからの反応は未だに好評なんだよね。

「んだば、まずんっ。ダンジョンが発生したのは今から20年前、何の前触れもなく現れました。それと同時に魔物も現れ、そしてダンジョンを中心に地域を分断するかのような結界も発生しました。それに対抗するかのように地球上の生物にステータスが配られました。魔物の種類は伝承に語られるものの中にはアニメやゲームのキャラクターの形をしている魔物もいます」

『真面目モード突入』

『あの当時はきつかった』

『無線通信が使用できなくなったのは地味にきつかった』

『結界内のダンジョンのドロップ品で解除が可能になるけどね』

『国内の結界は殆ど除去済みです』

『他国との交流の仕方も変わったねえ』

『魔物ねーゴブリンとかならまだ良かったんだけどね』

『神喰いゲームのやつらはヤバいって。流石に実機ほどではないけど』

『現実で携帯獣が見れるとは思ってなかった』



『私も携帯獣を従魔にしたいけど場所が……』

「当時活躍してくれた皆様本当にありがとうございます。……ん？ ハハ！ 携帯獣いいよね。僕はこの子たちがいるから今のところはいいかな。基本的にダンジョンは発生した場所に由来した魔物が出てくるよね。火山だったら火系統や鉱物系統の魔物。アニメ・ゲームキャラとかは舞台になった場所だね」

「曰く。聖地と呼ばれる場所のようです」

「そうだね。例えばコメントに出ていた神喰いゲームの魔物は舞台になった神奈川に、携帯獣は各世代の始まりの地にダンジョンがあるよ」

『戻った』

『欲しい物がどのダンジョンにあるのか分かりやすくしていいよね』

『聖地かそう言われると納得』

『ダンジョン内も結構再現されているよね』

僕の説明にコレティが相槌を打ち、アミーがパソコンを操作して話に合うように操作する。ダンジョン関係の時には日本地図を出しポインターと動かしたりして場所を示す。

「あとダンジョンからは定期的に魔物が放出されるよ。出てくる周期や規模はダンジョンによって違うけど、大体そのダンジョンから半径一キロメートルの何処かに出現しま

す

数が数なため自衛隊員で対応しきれない為、冒険者の制度が改めて施行されました」  
「それ以前は暗黙の了解みたいな形でしたね。国としては一般市民に危険な行為を行わせるわけにもいかなかったので苦渋の決断だったのでしょうか」

『うんうん』

『あの時ばかりは国の行動早かったよな』

『当時の状況だと悩んでる時間も惜しかったから』

ボクは当時の様子は分からないけれど聞いた話やコメント欄を見ると相当大変であつたであろうことが想像できる。

本当にありがたいことであると思いつつながら解説を続ける。

「それ以降、冒険者は自衛隊の外部協力者としての一面も持つようになりました。そのため冒険者は一定のランク以上になると、国からの支援金がもらえるようになりますよ。それと同時に国は危機の時に冒険者を招集する権利を持っています。ただ人数が多すぎると管理が覚束なくなつたためギルドが発足されました」

「今やほぼ全国民が冒険者免許を持っていますからね」

『自衛隊の一面が有るのは初めて知つた』

『支援金ってマジで？』

『Cランク以上からだな』

『だからCランクの試験はきつめなのか』

『ギルドってそういう理由でできたのか』

『冒険者免許今や高校の卒業試験に組み込まれているしな』

『路上で出くわした時襲ってくるのに倒しちやだめって言うのはきついからね』

『それな』

コメントの言うように冒険者免許は国民のほとんどが持っている。持っていないのは子供と言うのが現状だろう。

「そして魔物を倒すと魔核とドロップ品を落とすよ。僕たち冒険者はこれをお金に換えて生計を立てているね

ドロップ品については種類が多いからまた今度にするとして、魔核についてだけこれは必ず魔物からドロップするね。

前まではこのまま魔力資源として用いられてきたけど、今ではこれを加工して魔石とオーブにすることで魔力資源としての効率が上がったし、アイテムや装備の強化できるようになったよ。原石か宝石の違いかな？」

「原油とガソリンの違いといったほうが伝わるかもしれませんね」

魔核は水につけてしばらく置いておくと魔核水となりそれに火をつけると二酸化炭

素の排出しない火力発電の資源として重宝されてきた。

魔石は魔核から不純物を取り除き魔力のみを抽出し同じように使うことで効率が上がったものを言う。

魔石はもともとダンジョンでとれる貴重な魔力資源だったけど、加工方法が見つかって価値は落ちたものの需要が高まり魔力量の少ない物は価格も下がったが、多い物は今まで以上の価格となりとんとんといったところだ。

そして抽出した不純物を固めたものをオーブといい装備やアイテムの強化素材となつて重宝されるようになった。他にもドロップ品があるのでダンジョンは無駄の無い資源として重宝されている。

『魔石つてたまにダンジョンに落ちてるものだけ？』

『加工が出来る発表されたのつて5年前だけ』

『方法は知らないけどね』

『稼がせてもらってます』

『ドロップ品は魔物それぞれだからな』

『原石宝石つて』

『ガソリンか原油かの違いって方が分かりやすい』

『今まではドロップ品をただ加工してただけだからな』

『オーブのおかげで特性を付加出来るようになったのはでかい』

『気にしないで魔石の魔力を魔法に使えるようになったのも大きいよね』

「そうだね。装備に特性が付加出来るようになりました。これが新情報になるけど、特性を付与できるのは装備を作っている途中にオーブを加えて付与するか、僕みたいに付与術師が付与するかのどっちかだよ。今までは付与術師の人口が少なすぎてギルドがこの情報を出すのを控えていたみたいなんだ」

「注文が殺到してきて追いつかなくなるでしょう」

『「ここで新情報をぶち込んでいくう』

『知らなかった』

『成程』

『たしかに』

『納得』

「注意してほしいんですが、どういった特性が付くのかはいまだよくわかっておらず研究中なのでそこはご了承ください」

『了解』

『必須知識だ』

『切り抜きまわさない』

『クレームを減らすぞ』

これを言っておかないと注文したはいいが思っていたのとは違うとクレームが殺到するだろう。

それで心が折れて人口が減ってしまったらこちらにとつても利用者にとつてもたまったものではない。

視聴者の方々もそれをわかってくれたのかこの注意分を切り抜いて回してくれるようなので感謝の意に尽きない。

「他にも教えなきやいけないことはあるけど今回はここまです。どうだったでしょうか？ 勉強になったという方はこう評価とチャンネル登録の方をよろしく願います。それでは、ぐつらーい」

『ぐつらーい』

『ぐつらーい』

『ぐつらーい』

『ぐつらーい』

『ぐつらーい』

## 第一章

### 第1話 約束

暗い空間に一人のぼろぼろの女性が右手を釣り上げられた状態にいる。

よく見るとその手には赤い鎖の様な物が絡まっている。

その鎖は気味が悪いほどに脈動しており、まるで何かを吸い取っているかのようだ。左手もよく見ると鎖の跡がついており両手が繋がれていたことが分かる。

「条件を満たすものが現れましたか」

女性は閉じていた眼を薄く開け呟いた。

「少々思っていたより早い気もしますが……成程そういう手段になりましたか。

……と言うことは馴染むまでもう少し様子を見る必要がありそうですね」

そう言うのと女性は再び目を閉じ眠りについた

---

とある部屋に一組の親子がいた。

子供の方は目を輝かせ目の前にあるディスプレイと母親であろう女性を交互に見ている。

それを見た女性はくすくすと笑いながら膝の上に載せた子供が指さすものを一つ一つ説明している。

そんな中、子供がマウスを動かしとあるボタンを押してしまった。大慌てで母親は止めようとしたがもう時は遅く、仕様がなという顔をしながらディスプレイに向かって話し出した。

それに倣って子供も画面に向かって挨拶をすると母親の言うことに従いながらディスプレイに向かって話し出すのだった。

---

「スウ……スウ……」

ドンドン!! ガチャ

パタパタパタ……ドスン!!

「お兄さん!! 朝ですよ〜」

「うぐ?!」

いきなり訪れた衝撃に僕は目を覚ます。目を開けるとそこには金色の肩程まで伸び



た髪を持ちそのてっぺんには狐をほうふつとさせるような耳を生やし白いワンピースを着た少女が僕の上に馬乗りになり笑顔を向けていた。その後ろの方では髪と同じ色のフワツとした

「飛び乗るのはやめてって言ってるよね？」 環希ちゃんたまき。まあ、おはよう」

「えへへへっ。おはようございませす」

僕の上に乗る少女に注意すると彼女は笑顔を浮かべたまま顔を傾けた。

彼女を抱き上げて床に降ろすと、複数の部屋に近づいてくる足音が聞こえた。

「たまちゃん早いよー 一緒にお兄ちゃんを起こすって言っただのに……」

「……魔力を纏うのはズル」

「そうでしたわ。ごめんなさいですわ、さやちゃん、ほのちゃん」

「紗花ちゃんさやかに焰火ちゃんほのかおはよう」

そこに現れたのは植物のような緑色の肌を持ちそれより深い緑のストレートの少女と赤い髪を黒いリボンでツーテールに結って猫の様な耳と尻尾を持った少女。

二人とも肩で息をしていて環希を追ってきたということが分かる。

「すぐに着替えるから待っててね」

「「はーい」」

僕は三人の姿に微笑ましく思いながらそういうと、皆いい返事をして廊下に仲良く出

ていった。

——柘院。

それは僕の両親が建てた孤児院でダンジョンが現れた後の世界で様々な理由で身寄りを亡くした子供を引き取っている。

例えばダンジョン探索時の不慮の事故によって孤立無援になったり、三人の様に理由で人とは違う容姿を持ってしまったことで捨てられた子もいる。

近年ではV t u b e r が話題に上がってきていたおかげでそういう子を受け入れる人も多くなっているが。

「そう言えば今日は三人が朝食の当番だったよね？」

「そうだったんだけど昨日の晩に私たち三人母様に呼ばれたんです……」

「今日の朝食はお母様が作るって……」

「……おにいの初配信祝いだってママ張り切ってた」

「でもお手伝いしようと思ったが、みんなでいつもの時間より早く起きたんだ。だけど、厨房用の魔導人形も駆使してみたので、行ったときにはもう完成してんだ」

「それで手持無沙汰になってしまいましたので、各自時間を潰してからみんなでお兄様を起こしに行こうということになりました」

「……………たまが先走った」

「あー……………なるほど。それなら仕方ないね」

三人の言葉を聞いて僕は納得した。

他の子たちのお祝いといえる時にも起きることだから初期からいるこの子たちにとつても慣れた状況となっている。

それでもこの状況良しとせず、ちゃんと手伝いに行くように行動しているあたりいい子たちに育ったようだ。

(最初の頃は些細なことでも怯えてた子たちが立派になつて……………)

5年前この孤児院が設立された時のことをふと思い出し、つい当時と比較して微笑ましく思う。そんなことを思い出しながら三人の話に相槌を打ちながら食堂にたどり着くと香ばしい揚げ物の匂いが漂ってきた。

「この香りは……………唐揚げだ!!」

「……………おにいの好物」

「だから大変だと思つて早起きしたんだけど」

「流石はお母様ですわ。私たちでも今は2〜3体が限度ですのに」

「母さんの並列思考マルチタスクの数はすごいからね流石元Sランクの魔法使い」

食堂に入るとそこには大勢の人で賑わっていた。この孤児院には大人子供を含めて

総勢100人以上の人員がいる。

本来の孤児院ならある一定の年齢になると施設を出る必要が出てくるらしいが、両親がその後の対応が問題になっているのを良しとしなかった。

その対策として、ボクも何枚か囁ませてもらっているいくつかの事業に手を出し受け入れ先となる場所を創設した結果がこの人数だ。

中にはこの孤児院に感謝して職員として働いている人たちもいるし、この1〜2年ここを故郷として帰省してくる人も出てくるようになった。

好条件な条件の孤児院と噂されていて何を勘違いしたのか己の子供を入居させたいという親が出てきてしまい、そう言う人の子を審査するにあたり幾つかの条件を付けている。

その中でも必ず行うことは、親権者との対談、子供のみとの対談、普段からダンジョンに通っているかという問いと預けることになった際、親権を完全にこちらに譲れるかという問いだ。

基本的にうちはダンジョンが発生した影響のある子供を引き取っているが、ダンジョンの攻略に集中したいからという理由だけで子供を預けようとするものもいる。

そう言う親は基本的に最後の問いをすると諦めるのだが、この問いに頷いて対談で問題ありと判断したものはそれ以上子供に係わらないようにするなどの措置も取ってい

る。

「おはよう、母さん」

「あら飛鳥ちゃん起きて来たのね。おはよう。初配信おめでとう」

抑揚のない機械的だが確かに人の声。

彼女が僕の母でその視た目は20代と見紛うほどの肌のつやを持っており、飛鳥と同じ黒髪の三つ編みのハーフアップロングのヘアスタイルでどことなく飛鳥の顔立ちと似ている。

——柊 あきな 陽菜

彼女の声の発生源は彼女の胸元にある音響石を含んだ魔道具ネックレスでこれはイヤリングに付いている感応石が発言したい内容を感じて動く二対一体の魔道具である。

五年前この孤児院を作るきっかけの事件で母さんは声とあるものを失った。

「僕がV t u b e r になったら一緒に大きな舞台でコラボしよう」

幼い時に母さんと交わした約束を果たせなくなりその原因の一部に自分が係わっていることに僕は絶望しかけた。

そんな僕に「こんな不思議な世界になったんだもの。きつと取り戻せるわ」と筆談で母さんが言ってくれたおかげで「僕が取り戻して見せる」と奮起できたがその絶望感は

今でも思い出すことが出来る。

母が持っている魔道具は奮起した結果なのだが、それは一時凌ぎに過ぎない。

目標は完璧に声を取り戻すことだ。

この開発のおかげでいまピヨッターのトレンドに上がっている（来る最中に確認した）仮面の着想も得られたので悪いことばかりではない。

まだ足取りもないけれど。最終目標は母さんの声を完璧に取り戻すことだ。

約束は大きな舞台でコラボすることなので、もう一つの方は最悪最初から取り戻せばいいと相互の認識の元なのでそれに向かって突き進むだけだ。

なので僕から母さんに言うことはこれだけだ。

「ありがとう。約束の第一歩だよ。母さん」

「ええ、私の夢だもの必ず叶えるわよ」

## 第2話 ダンジョンに行こう

「そう言えばお兄様。本日はご予定入ってますの？」

「ながったら付き合っつてほしいところが有るんだけど」

「……ダンジョンに行きたい」

朝食を食べ終わると環希ちゃん、今日、三人で予定を決めていたのか紗花ちゃんと焰火ちゃんが頼みたい事を代弁した。

その言葉に僕は今日の予定を頭の中で確認して質問に答える。

「ボクも丁度ダンジョンに行こうと思っつていたからそこで構わなないならいいよ」

「「やった!!」」

本来ならばダンジョンには15歳からしか入ることが出来ないんだけど。

10歳の誕生日にステータスが見れるようになりそこから自分の適性を磨いたり、新たにスキルを取得する期間があつて、16歳の誕生日の時に職業が定められ入ることが出来るようになるんだよね。

因みにステータスに筋力等の数値は記載されてなくて、確認できるのは名前・年齢・性別・職業・魔力値・所持スキルで、ギルドカードに記載されている能力ランクは人が測つ

たものだよ。

それまでは入り口に不思議な膜が張られており一部例外を除いて通ることが出来ないんだよね。

だけど、どんなことにも抜け道は存在するらしくて、ボクも偶然やつちやつただけであることを行うと10歳以前でもステータスが現れるようになるんだ。

僕の場合は職業が現れたのは他の人達と同じだったんだけど、この三人も含めて孤児院の子たちの中でしたか確認できていないけれど、2月頃に16歳になる以前に職業が定まってしまった子たちがいた。

職業が現れる前はダンジョンの外に出てくるモンスターにはちよつかいを掛けなければ問題ないけど、職業が決定されてしまった場合気性の荒いモンスターは問答無用に攻撃してくる。

ギルドの方でも原因を追求しているがいまだに結果は出ていないから、まず自衛の力を持たせるために冒険者免許を持つものが同伴ならダンジョンに入ることが許可されることになったんだ。

「ッあら今日はみんなでダンジョンなのね。気を付けて行ってらっしゃい」

「うん。行ってきます」

「行ってきます」



「お兄様、その装備ってもしかして？」

「うん、みんなに手伝わってもらったものだよ」

「確か配信用に準備したやつでしだよね」

「……にや、似合ってる」

「マスターの新しい一張羅ですね」

《グツ!!》

ダンジョンに行く準備を終えて家を出て数分、気になっていたのか環希ちゃんが僕の装備について確認してきたので僕は顔をほころばせながら答える。

僕の姿は髪の色以外は天結らしいじゆの姿と同じで、水色の半衿と二の腕部分に切れ込みが有り半衿と同じ色が除いている白衣《びやくえ》の法衣を纏い、白い足袋と水色の紐の雪駄を履いておりその方にアミーが佇んでいる。

そしてその背中に背負っている身の丈ほどある大槌これが僕の近接の武器である。

聞いてきた環希ちゃんの装備は、上が白い小袖でしたが赤いスカートと巫女服のよう

な服に同じく足袋と赤い紐の雪駄だ。

腰のあたりにポーチを携えていて中には大量の護符が入っている。

他の二人の衣装はと言うと、紗花ちゃんは青いロングワンピースに無骨な茶色のベルトの頑丈そうな革靴を履いている。彼女の近接武器は塚が茎の様になっていてその先が棘のような槍だ。

焰火ちゃんは胸元の赤いリボンが特徴的な学生服のような黒いドレスで厚底のブーツを履いているね。

彼女は拳闘術を使っており腰には猫の様な肉球の付いた可愛げのあるグローブが吊り下げられている。

コルティはいつも通りのメイド服を着ており腰の左右に3本ずつナイフの鞘が携わっている。

その他に各自ブレスレットやイヤリングなどの装飾品をつけて火力の強化や耐久の上昇などをしている。

武器に関しては各自時で購入したりドロップしたものはあるが、防具や装飾品は僕が付与術師であることの相まって基本的に孤児院内で作成しているんだ。

荷物は各自リュック一つと少ないが実はこのリュックは魔道具の一種で仲が拡張されていて思うより荷物が入るようになっていて思っているよりは物が入るようになって

ているんだ。

まだゲームのように自由に出し入れする機能はまだ開発されていないけど時間の問題だろうね。

「今日はどさ行くんですか」

「今日は黒双山くろふたのダンジョンに石を取りに行く予定だよ」

「黒双山……たしか土属性のダンジョンでしたわね」

「木属性も入ってるから気を付けてね」

「……おにい、ついでに肥料と種」

「んだ。そしたらみんなの負担減らせるべ」

「そうだね。出来るだけそうしようか」

皆の装備を確認していると、紗花ちゃんが今日の目的地を聞いてきたので答える。

すると環希ちゃんがあやふやだけどダンジョンの属性を確認してきて、焰火ちゃんはそこからダンジョンでドロップするものを思い浮かべて孤児院のための提案をしたことに紗花ちゃんも賛同し僕もその提案がいいと思ったので受け入れることにした。

ダンジョンはだいたい5つほどの属性に分かれていて、木属性、火属性、土属性、金属属性、水属性となる。

今回行く黒双山ダンジョンは不思議な力を持った石を算出するダンジョンでそれが

今回の目的なんだ。

黒双山は孤児院の近くにあるダンジョンで、ダンジョンが発生する以前『日本のピラミッド』『UFOの訪れた場所』として知る人ぞ知るパワースポットだったんだよ？

そして近くにストーンサークルといわれる遺跡があつて丁度その間となる場所にダンジョンの入り口がある。

元々関連が有るのではという話もあつたけど、ストーンサークルが大地の力を、ピラミッドが天の力を集め二つの力が合わさり、石が産出されるという結果で証明された感じだね。

そんな感じでいろいろな話題で盛り上がりながら黒双山ダンジョンに向かう途中にある坂を上り切った後の交差点付近でそれは起きた。

「おっ?」

「あれはゴレムですね」

石でできた巨人それはダンジョンから定期的にモンスターが放出される現象。

ダンジョンを中心に1kmの範囲でそれは起きて原因は究明されていない。

「チャンスだけど……どうしようか?」

「お兄さん……あの子畑のお手伝いさんにしてえです」

「耕すのに便利」

「符の節約ができますわね」

——ダンジョンの外に出た魔物は使役することが出来る。

逆にダンジョン内の魔物は使役することは出来ない。

おそらくダンジョン内のモンスターは倒すと消滅するのに対し、外に出てきたモンスターは肉体が残ることが関係しているのだろうね。

それが広まったのは今から4年前、魔力を持って余し苦しんでいた少年が気まぐれで道端に現れた濃厚なスライムを抱き上げ「どうせ余つていらぬから君にあげる」といい、魔力をスライムに分け与えたのが始まりだ。

スライムはダンジョンから外に出現しても日中は太陽の熱で1時間もたたずに中の水分が蒸発して死んでしまう。

大気中に魔力が満ちていて晴れているダンジョン内では消滅しないことから魔力があれば死なないんじゃないかと少年は思ったんだ。

そう思つて魔力を満たした結果、スライムはそれまでと打つて変わつて理性的な行動をし初めた。

その後、現れた魔物を倒そうとする冒険者からスライムを守ろうとする少年を逆に守るといふ行動まで見せた。

そこからギルドはダンジョンの外に出てきた魔物は見つけたら必ず討伐するという

方針から、討伐若しくは使役になり使役したなら報告をとという方針に変わった。

「ダンジョンに行く前に消費しすぎるのも問題だから戦闘は僕たちがやるね。誰が従魔にしたい?」

「……たまの護衛役にもなる」

「んだ、魔力的相性的にもそのほうが良い」

「では、私の従魔にいたしますね」

「決断が早くて何よりです」

コルティの言葉を皮切りに僕は背負っていた大槌を構える。

「ソレじゃあ行くよ!! アミー!! コルティ!!」

## 第3話 ゴーレム捕獲戦

ゴーレムに駆け寄りながら飛鳥は従魔と思考のリンクを行いつつ状況を確認する。交差点の中心に佇む巨体、その大きさはゆうに5mはありそうだ。

周囲には倒壊した幾つかの建物、この個体がやったわけではないがいつ見ても酷いありさまである。

そんな中ようやくゴーレムは彼が近づいてくることに気が付いたようで首を飛鳥の方に向ける。

「もう気付かれた!? 他の個体に比べると索敵範囲が広いのかな? まあ、まずは周囲の被害を抑えないとね!」

飛鳥の接近に気が付いたゴーレムは、こちらにその巨体を向けその右腕を大きく振り振りそのこぶしが彼に狙いを定める。

「判断もよくて、滑らかな動き。でもそんなの喰らわれないよへ空を駆ける星の如き動きを我に下ろしたまえ」  
【加速】アクセラレート 【跳躍】ジャンプ からの 【衝撃】インパルス

普通のゴーレムの場合この大きさだともう少し察知するのも動作も遅く攻撃される前に1撃を負わせることは容易である。今回の個体はその両方に優れているのだろう。

それならばと飛鳥は速度強化の魔法を使う。

飛鳥が魔法を唱えると彼の全貌に合わせるように青白い光で描かれた魔法陣が浮かび上がり、その魔法陣が体を潜りその後、プラスマ帯になり足首の周りに留まった。

そして「成長スキル」《移動術》の中にある「跳躍」で前方に跳び迫るゴーレムの腕をかわずとともにその勢いを利用し、《大槌スキル》「衝撃」を使い左に大きく振りかぶってゴーレムの脇腹に攻撃する。

ドゴツ!! ズシン!!

その小さな体の何処にそんな力が有るのかと思うほどに、石の巨人は勢いよくその身を空中に打ち上げられたのち重力に従いその身を地面に吸い込ませる。

そこは道路のアスファルトの上ではなく大幅にずれた土の上。

ゴーレムが落ちたところからは土煙が上がっている。

すかさず飛鳥はゴーレムを飛ばした方へ追撃を仕掛けるため駆けだす。

「マスター!!」

「ツ!!? アミー!!」

コルティの叫びとともに土煙の中から石の礫が飛び出してきた。

それは、まっすぐに飛鳥の元へと向かってきたが、彼の掛け声とともにアニムリウスが飛鳥の肩から飛び上がり彼の手に収まる。



その体を飛鳥は走る勢いのままアニムリウスを礫に向けて投げつける。

アニムリウスは礫にぶつかる瞬間にその体を広げてその礫を飲み込んだ。

「……魔法まで使つて来るなんて………本当に優秀」

飛鳥はアニムリウスを投げたことよつて勢いが消えたので立ち止まり、ゴーレムが魔法を使つたことに対して驚きつつもそのことに対して口角を上げる。

煙が晴れるとそこには大きな足は土に飲み込まれているが健在なゴーレムの体の前で茶色い魔法陣が消えていくところだった。

スチャツ!! ペツ!!

飛鳥の横にアニムリウスが着地するとその体から拳サイズほどの石の塊が数個でてきた。こんなものが当たつてしまつていたらひとたまりもなかっただろう。

「そつちがそう来るなら僕だつて!!」

クリス・トニトウルス・トリア  
「雷 槍 III」

飛鳥が唱えると目の前に3つ水色の魔法陣が現れそこに雷が現れ収束し小さな槍となつてゴーレムに向かう。

その魔法をゴーレムは腕を振るい雷の槍を弾くことで攻撃を防ぐ。

“トスツ”

攻撃を防いだゴーレムの手に小さな刃物が突き刺さる。

刃物が飛んできた先にはコルティが降りぬいたような姿があつた。

「〈金生水、水生木、木生火〉」ニヒル・エールブティオー「爆　破」

コルティが咄くとナイフが小規模な爆発を起こしゴーレムの腕を破壊する。

これによりゴーレムは、四肢のうち3つが使用不能になるが、ゴーレムも黙ったままやられるわけもなく再び魔法陣を起動させ「石弾」をコルティに向かって打つ。

しかし、コルティはそう来るのが分かっていたような動きで魔法によって発生した石の礫を避ける。

「やっぱり指示が無ければ攻撃した相手をターゲットにする特性は変わってなかったね。これでラスト一本【衝撃】」

ゴーレムが魔法を放った直後に飛鳥が近寄り、四肢の最後の一本を破壊した。

「じゃあ、アミー【魔力吸収】お願いね」

飛鳥がそういうとアムリウスがゴーレムに覆いかぶさり不思議な光を発しだす。

暫くゴーレムはアムリウスを引きはがそうと藻掻いていたが、はがすための腕がなくなっただけでそれも出来ずついに動きを止めた。

「お兄様大丈夫かしら？」

皆様初めまして。

私は終 環希、終院の初期メンバーですわ。

同じ初期メンバーのさやちゃんとはのちゃんと一緒にお兄様と一緒にダンジョンに向かつておりましたの。

ああ、さやちゃん、たまちゃんって言うのは紗花ちゃんと焰火ちゃんのお愛称ですわね。私たちの夢は三人そろってお兄さまのお嫁さん……と今話その話をしている状況ではございません。

私たちは終院に引き取られる前はとある研究機関の実験台としてひどい扱いを受けていましたの。

千尋お姉さま含めて当時の私たちはその状況を当然のものと思っていたのですけれど、お父様とお母様、お兄様のおかげで一般的な感性を得ることが出来ましたわ。

とくに後処理に追われていたお父様とお母様の代わりの様に自分が大変な状況であることを隠してまで私たちに気遣ってくれていたお兄様には感謝しかありませんわ。

何故この話を今しましたと言いますと、お兄様が前に出て私たちが後ろから見ているだけの状況が少しだけあの時の構図に似ておりました……

ああ、だからと言ってお兄さまを信頼してないと言う訳ではございませんのであしからず。

「ダイジョブだよー 私たちだってあのころとは違うんだから。いつでも仕掛けれる」  
「うん……アミーとコルティもいる。だからその時までは見学ぼう」

そうですね。ほのちゃんの言う通り、今はアミーとコルティも一緒におりますしね。

それに紗矢ちゃんと一緒に私たちもあの頃と違ってただ見ているわけでもなく、お兄様が危なくなった時に備えていつでも出れるようにしていますわ。

「あれは【加速】ですわね」

まず、お兄様は自分の素早さを上げるために魔法を使った。あの魔法はダンジョンが始まった当初に現れたものではなくお兄様が個人で開発したものだ。

最初の強化は筋力を上げるだけで人の体のことは考えられていないのでそのままでは関節が外れたり、肉離れを起こすなど支障がありましたわ。

なので、お兄様含め付与術師立ちは日夜実験を積み重ねギルドにその術式を提出することですわ。

「おお!! お兄様がぶっ飛ばしました」

「よし!!」

お兄様がゴーレムを吹き飛ばした衝撃で上がった土煙に向かって走り出しましたわ。

「マスター!!」

「コルティが何かを察知したのか、お兄様に注意のために呼びかけましたわ。」

その時土煙から何か突き出てきてそれに向かってお兄さまがアミーを投げつけましたわ。

「ゴーレムが魔法を？」

「……良個体」

「魔力足りるでしょうか？」

「魔物を使役する方法は魔物の中にある魔力を押し出して使役する人物の魔力で満たすのですが、動きもよかったですし魔法も使える個体となるとその場合はあちらの抵抗も強いらしいのですし同い年の子たちよりは鍛えてますので魔力の量も質も自信はありますわ。」

「皆さん、マスターがお呼びです」

「そんなことを考えている間にお兄様の戦闘が終わってしまっていたようで、コルティが呼びに来ましたわ。」

「お兄様を待たせるわけにもいきませんので早々に向かうと致しましょう。」